町史編さん室だより

令和９年度の安平町史発刊にあたり、町史編さん作業の進捗状況などをお知らせします。

問合せ　総務課町史編さん室　☎㉒2511

第１回目は「安平村が開村するまで」というテーマで歴史を紹介しました。今回は、安平村として開拓・開発が次第に進む中で、開村後の戸長役場時代における産業の発展についてご紹介します。

第二回　安平村戸長役場時代の産業の発展

この時代の「産業概観」

明治三十三年の安平村開村から六年間は、諸産業の草創期であり、安平村発展の基礎確立の時代であった。当時は「北海道国有未開地処分法」によって大地積の国有未開地無償貸付の道が開かれており、村内においても牧場や田畑開墾目的の土地貸付者が続出したため、農・畜・林業の発展はめざましく、特に林産・馬産では管内有数の地位を占めた。また、工業については、北海道炭礦鉄道会社追分骸炭（コークス）製造場および早来の桜組製渋所が、いずれも当時我が国最大といわれる規模をもって創業したほか、次々と工場が進出し、飛躍的に発展した。

農業の発展

農地開拓が緒についたのは明治二十二年で、佐々木駒吉、ヤエ夫妻によって、フモンケ地区（現・早来富岡）に最初の鍬が下ろされたことから始まる。明治二十四年、札幌区の藪惣七が植苗村字アビラ（現・東遠浅地区）で開拓に着手、翌年には、室蘭線の開通と追分駅の開業により、福井県人の松浦幸寿がポンアビラ地区（現・追分美園周辺）に土地貸付を受け開墾に従事した。明治二十六年、鳥取県人の布広杢太郎がシアビラ（現・早来瑞穂）に水田を開き、翌年には反収三俵の収穫を得て、この地における初の稲作に成功した。また、明治三十四年以降、村内各地域で開拓が次第に進められ、明治三十八年には、農業戸数もフモンケ地区一四戸、安平・シアビラ地区一〇七戸、早来・下安平地区六十二戸、遠浅地区一一三戸、ポンアビラ地区七十二戸、中安平・明春辺地区三十七戸となり、水稲作付面積一四八ヘクタール、畑作付面積八八七ヘクタールと開拓の進展は著しいものであった。

畜産業と林業の発展

安平村は、農耕不適とされた火山灰地であり、積雪量が少なく、年間を通じて馬を放牧するには好適の地であったことから、牧場目的での土地貸付出願者が続出した。村内の至るところに開設された牧場では数十頭の馬が飼養され、明治三十六年十二月現在における牧場数は十三を数え、総面積は約四六二八町歩にも及んでいた。こうして、畜産は急速に発展し、早来では馬市が開かれたほか、早来、安平、追分では競馬会も開催され、早来の競馬会には遠方からの出場馬が集まるなど、道内屈指の盛況であった。また、土地貸付の目的は牧場という名目ではあったが、主目的はむしろ立木目当ての者も多かった。飼料畑や畜舎を作って相当数の牛馬を飼養するため、その土地に密生する大木を伐採し、角材や鉄道枕木に造材して搬出する仕事が盛んに行われた。山元から搬出されて各停車場前に山積された木材の山は室蘭線の名物とまでいわれた。

工業の発展

東京に本社をもつ合資会社桜組は、皮革などの染料としてかしわ樹皮を原料とするタンニンエキスを製造するため、安平村に豊富なかしわ樹に着目した。明治三十五年より建設工事に着手し、翌年には合資会社桜組製渋所北海道支店が早来に創立され、タンニンエキスの製造を始めた。タンニンエキスの防腐力は好評であり、日露戦争当時は軍需用皮革の需要増大によって、事業も発展し、市街地に活況をもたらした。

北海道炭礦鉄道会社では、粉炭処理対策としてコークスの製造を企画し、追分に骸炭製造場を新設することになった。明治三十四年に着工し、翌年には第一期工事が完成して操業を始めた。ヨーロッパの最新式の機械を使用した追分骸炭製造場の設備規模は当時我が国最大のもので、日露戦争の開戦後はコークスの需要がますます増大して好況に向かった。

桜組製渋所

北海道炭礦鉄道会社
追分骸炭（コークス）製造場